にいがた
北から南から

佐渡の住人として生きる

上杉俊孝

一　60年ぶりに佐渡の住人になって

私は定年退職後、半年ほどして生まれ故郷の佐渡市に帰ってきました。43年ぶりでした。中越地震のすぐ後の11月に帰りました。帰って半年は家の周りや家の中の掃除、片付けに明け暮れました。とにかく前の庭にはマムシが、庭の大きな木の穴にはヘビの住処になって毎日ちょろちょろ顔を出していました。冬になっても山に入って、木の枝や竹を切ったり草を刈ったり、人が歩けるように汗を流しました。

半年後に「農業の生産組合」からの誘いがあり、2年目には「柿組合役員」「壮年会会員」「高校の同窓会金井支部の役員」、3年目には「集落の役員（副部落長）」、田んぼの「水管理当番（3年間）」もやりました。4年目には、集落長、柿組合長、水当番の中心、その頃には、農協の役員（支部運営委員）、佐渡市の旧金井町の「地域審議会委員」など引き受けました。

二「農事組合法人　大和田営農組合」では

私たちの集落は、佐渡市のほぼ真ん中にあります。標高50m～100mの高台の上にあり、北は金北山、南を見ると国仲平野や真野湾が見える自然豊かなところです。この自然豊かな地域をどう維持・管理するか（子どもや孫に引き継いでいくか）が大きな課題です。その中心になって取り組んでいるのが大和田営農組合です。私はいま組合の代表（会長＝組合長）です。私たちの集落では空き家が増えています。集落の世帯数は94戸、一人暮らしの世帯は25戸、農業を個人として取り組ん

でいるのは8戸、大和田営農組合員は23戸、そのうち作業に参加しているのは14戸、集落の農地面積は77ha、営農組合が預かっている農地は62ha（80％）です。

中山間地に小さな田が400枚近くありますので作業が大変です。田植え、草刈り、収穫時等々には人手が足りず作業が遅れがちになります。しかし、将来の希望も出ています。新しく集落に家を建てて入った人たちが22戸あることです。若い方々が多く、子どもたちの活気ある声に励まされています。

三　3期目の「大和田保全会」では

そこで、国や県の補助金（農地・水・環境直接支払い交付金）を活用しながら、農地、水路、農道等の維持・管理に何とか取り組んでいます。集落の全戸が参加する組織（大和田保全会）を立ち上げました。現在は3期目です。1期が5年で、もう13年目に入りました。1期は会計担当、2・3期は会長を引き受けて活動に参加しています。

農用地の畔の草刈り（休耕田も含めて）、水路の泥上げ、農道の砂利引き、草刈り、U字溝付け替え、ため池・ファームポンドの管理、文化財の敷地やその周辺、公園の草刈り、道普請、道路脇の木の枝切り、生き物調査（とき認証米）、集落の文化祭への作品の出品・写真の出品等々、幅広く共同作業に取り組んでいます。

四　「大和田基盤整備推進協議会」では

大和田地区の田は、昭和41年に整備した田のままで面積は大きい田で10a、ほとんどは小さい田で5a以下であり、組合に田を預ける人もどんどん増えてきました。田への進入路も狭く機械が入ることは危険です。組合では田植え機、トラクター、コンバインなどの大型機械を導入しており、このままでは、効率が悪く、事故などがいつ起きるかもしれません。そこで、県や国が推進している基盤整備事業に取り組むための組織を立ち上げまし

にいがた

北から南から

た。

この事業は国・県が95％、農家の負担は5％でできること、田の面積は、1区画が30～50ａにする。しかし、条件として①基盤整備事業の面積の20％は園芸作物を作らなければならない。②田の所有者の全員の同意が必要であること。③完成までに長い時間がかかることです。田の所有者の中には、もう佐渡に帰ってこない人も結構います。この協議会がリードしているのが営農組合です。完成までにまだだいくつかの困難にぶつかるでしょう。

ロシアのウクライナへの侵略等世界の食糧不足が心配なこの時期、日本でも自国で農業・食料を安全・安心に自給できるよう確保していくことはどうしても必要だと思います。そのため、この佐渡の田舎でも大事に取り組んでいきたいと思っています。

五　佐渡島全体のことについては

今「佐渡金山・西三川金銀山、鶴子銀山を世界遺産に」との運動が行われています。しかし、金山の歴史をありのまま推薦の理由にする取り組みが必要です。江戸時代の金山、明治以降の近代化の金山、その中でアジア・太平洋戦争時、朝鮮の人たちを強制労働に従事させた歴史をありのまま記録して残し、今こそ、きちんと当時の誤った戦争、強制労働に対し反省・謝罪の記録されることが大事だと思います。

新潟県の中でみたとき、佐渡市は非常に厳しい生活環境の中にあることが分かります。

1つは、佐渡航路のことです。佐渡市には国道350号線が通っています。これは新潟港～両津港、佐渡市両津＝金井千種＝佐和田＝真野＝小木港＝直江津港を結ぶ線です。この航路が民間経営になりました。佐渡市民にとっては死活の問題であるにもかかわらずです。運賃をもっと安く、行き来できるようにしてほしい！

2つ目に、病院の問題です。佐渡市には市立病院（両津、相川）、厚生連病院（佐渡、羽

茂）、佐和田病院の5つの病院があります。ところが今年に入って、佐和田病院は廃止（月何回かの開業）、羽茂、相川病院は診療所にに格下げ、両津病院は病床を減らすことになりました。緊急を要する病気や大きな手術は新潟までヘリコプターで搬送する。これでは市民は安心して暮らしていくことが出来ません。もっとお医者さんを、病院の充実を！

3つ目に柏崎刈羽原発が佐渡島のすぐ近くにあることです。直線距離でみますと50kmしか離れておりません。原発事故が起きたらどうなるか。佐渡の人たちは逃げることができません。柏崎刈羽原発は廃止を！

4つ目に、佐渡の文化、ジアス、ジオパークと共に、佐渡をエコの島として取り組んでいきたい。

（うえすぎ　としたか・佐渡市千種）

田舎のうまいもの考
—手づくり『六郷（ろくごう）の郷土食』編集余話—

細貝正人

一　なぜ「郷土食」か

私の居住する秋葉区六郷では、二〇一三年から六年をかけて二〇一八年に六郷村史『村の自画像』を完成させました。史料（又は資料）のきわめて少ない中で七人のにわか素人編集集団だけに、編集作業はまさしく悪戦苦闘の日々でした。

その編集途上で、部分的であっても発掘できた村の暮らしや習俗にかかわるいくつかを取り上げた文化事業を、折々に取り組んできました。農具も含む民具展、青龍社を主宰しました。